



文部科学省

地(知)の拠点

平成25年度採択 文部科学省「地(知)の拠点整備事業」

地域と共創する北海道経済活性化モデルと人材育成

平成25年度  
事業報告書



## はじめに

小樽商科大学 学長

和田 健夫

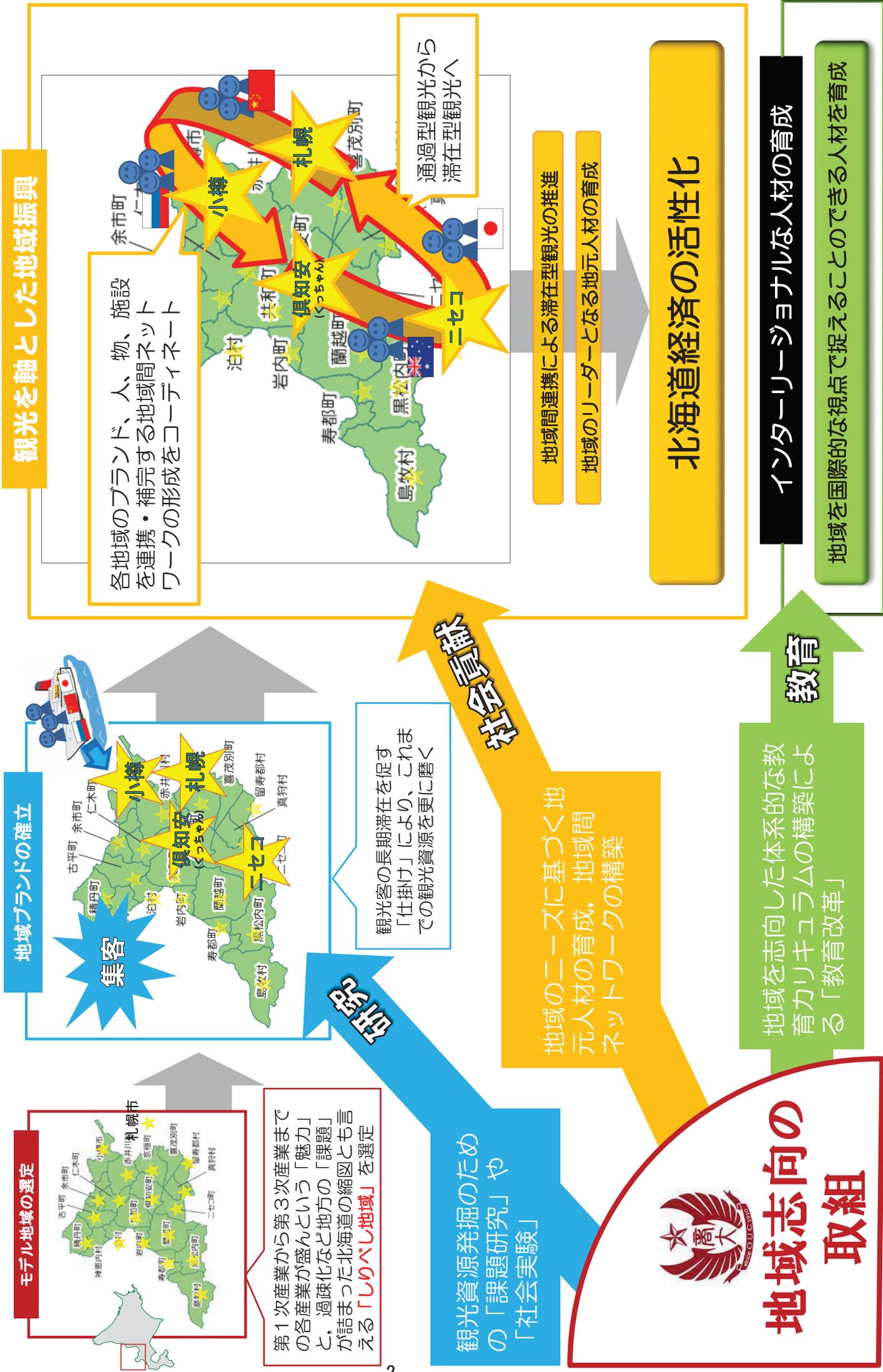
地（知）の拠点整備事業は、小樽商科大学がこれまで行ってきた教育、研究、社会貢献の集大成ともいふべき事業です。小樽商科大学は、「実学の精神に基づいた教育研究」を進め、その成果を社会に還元する（社会貢献）ことを使命とし、努力を重ねてきました。すなわち、実学教育は、前身の旧制小樽高等商業学校以来の伝統であり、今では多くの大学で行われるようになった地域との連携授業、OB・OGによる講義、PBL、サービス・ラーニング等も全国に先駆けて取り組んできました。2004年にはビジネス・スクールを立ち上げて高度専門職業人を育成しています。研究・社会貢献の面では、本学は、優れた理論的、基礎的研究を行うとともに、近年は、その成果にもとづいて北海道経済が抱える諸問題を学際的、実践的に研究することに力を注ぎ、そこでも数多くの実績を残しています。本学の強みの一つは、北海道の企業や官公庁との間に構築された幅広いネットワークです。それは、ビジネス創造センターの活動やビジネス・スクールの修了生・同窓会である緑丘会との連携によって作られてきました。本学の地（知）の拠点整備事業は、以上のような実績によって支えられています。そして本事業の最終目標は、教育＝北海道の発展に貢献するインターリージョナルな人材育成です。遡ること1949年、大野純一初代学長は、本学と卒業生と地元の間形成された密接な繋がりが真の教育を可能とすることを訴えて、当時小樽経済専門学校の新制大学への単独昇格の必要性を強調しました。これが本学の原点です。

## 目次

活動履歴 .....	1
事業概要図 .....	2
<b>地域志向研究プロジェクト概要</b>	
【研究】	
① 二級河川余別川（北海道積丹町）におけるサクラマス・サンクチュアリをコアとした地域活性化方策の検討と冬季環境調査	5
② ニセコ地区における中長期滞在型観光のモビリティに関する研究（1） －観光客行動に関する基本調査－	6
③ 小樽にかける「北前船」の記憶の発掘と観光資源化に関する基礎的研究	7
④ 後志における農水産品のブランド化の課題に関する研究	8
⑤ フェイスブック上の小樽の中国語情報は小樽滞在に結びつくか：外国人に対するソーシャルネットワーク利用動態調査	9
⑥ Web ページ，フェイスブックページ上の小樽の日本語観光情報は，小樽のイメージおよび小樽への訪問探求にどのように寄与しているかに関する現状調査	10
<b>参考資料</b>	
地域志向型教育プロジェクト助成公募要領 .....	11
地域懇談会議事要旨 .....	16
新聞等掲載事例（※1） .....	33

（※1）新聞等掲載事例については，各新聞社の著作物であることから，web サイトでは公表しておりません。

# 地域と共創する北海道経済活性化モデルと人材育成



## 地域と共創する北海道経済活性化モデルと人材育成

小樽商科大学が所在する「しりべし地域」は、観光地として名高い小樽市、ニセコ町、倶知安町を含む地域であり、農業や漁業、ものづくり、商業など、第1次産業から第3次産業までの各産業が盛んという「魅力」と、過疎化など地方の「課題」が詰まった北海道の縮図とも言える地域です。

本事業では、この「しりべし地域」に、北海道の観光拠点である「札幌」を加えた広域観光圏を対象とし、地域ブランドの確立と観光ネットワークの形成を通じて「総合観光地域」の創出を図ります。本学と地域が課題を共有し、それぞれの資源を活用した「滞在型観光」にかかる取組を起爆剤とし、観光を軸とした産業振興及び人材育成により、北海道経済の活性化を目指します。

### 教育

#### 「インターナショナル」な人材を育成するための教育プログラムの構築

北海道経済を取り巻く環境は、TPP や北海道新幹線の開通などにより著しく変化しており、様々な分野で国際化の波が押し寄せています。道内産業においても、国内だけではなく海外に目を向ける必要があり、「地域を理解」し、「海外に繋げる」ことのできる【インターナショナル】な人材が必要です。北海道経済に役立つインターナショナルな人材を育成し、北海道内に継続的に供給することを目的として、これまでの個別各論的な地域教育科目を体系化するとともに、国際的視点を加えた新たな教育プログラムを構築します。

- 「地域」視点を養う教育  
地域の「人」と共に学び考える教育拠点（街中教室）を各地域に設置して教育を展開し、地域社会の一員としての意識、意欲及び責任感を育成します。
- 「国際的」視点を養う教育  
観光関連の教育実績を持つ海外協定校への学生派遣や共同カリキュラムの実施のほか、ICTを活用した双方向通信による語学教育を行います。



### 研究

#### 観光客の長期滞在を促す「仕掛け」の発掘による地域ブランドの確立

本学は、これまで北海道が抱える地域財政の危機や、失業、経営不振といった課題に対し、地域に存在する大学として、産学官連携拠点である「ビジネス創造センター」及び地域研究を組織的に推進する「地域研究会」を中心に、数多くの共同研究を重ねてきました。本事業では、これまで培った研究ノウハウや自治体等との関係を土台とし、潜在する観光資源を新たな観光資源として開発するための研究や、観光情報の発信、商品・観光パッケージの開発、国際マーケティングや地域通貨の流通実験など、観光客の長期滞在を促す「仕掛け」の発掘に特化した「地域課題研究」及び「社会実験」を推進し、「地域ブランドの確立」を目指します。



### 社会貢献

#### 地域の人々を主役とした「しりべし地域観光ネットワーク」の形成

総合観光地域の創出に向けて、地域に対して有形無形のサポートを行います。具体的には、総合観光地域づくりの主役となる地域住民・観光従事者を対象に、これまでの本学の公開講座の実績と課題研究の成果を基に地元人材育成プログラムを策定し、地域の人々に学習機会を提供します。また、本事業に関わる地域 NPO 法人等の設立及び運営を支援するほか、各地域で地元住民と具体的な熟議を行う「地域懇談会」を開催します。本事業における取組の成果については、フリーペーパーやホームページ等で情報を発信し、地域間連携をコーディネートすることで、地域の人々を主役とした「しりべし地域観光ネットワーク」の形成を図ります。

大学等名：小樽商科大学（連携自治体：小樽市、札幌市、倶知安町、二セコ町、北海道（後志振興局））  
 事業名：地域と共創する北海道経済活性化モデルと人材育成

小樽商科大学が所在する「しりべし地域」は、観光地として名高い小樽市、二セコ町、倶知安町を含む地域であり、第1次産業から第3次産業までの各産業が盛んという「魅力」と、過疎化など地方の「課題」が詰まった北海道の縮図とも言える地域である。

本事業では、観光客の長期滞在につながる「総合観光地域」の創出を図るとともに、地域に欠かさない大学として、地域を志向した教育を組み込んだ教育改革を進め、北海道経済の活性化に必要な、地域を国際的視点で捉え発信できるインターローショナルな人材を育成するなど、観光を軸とした産業振興及び人材育成により、北海道経済の活性化を目指す事業である。



【事業の成果】

	25年度	26年度	29年度 (目標値)
地域志向科目の履修者数	616名	1,184名	1,820名
地域志向教育プロジェクト申請数	0件	9件	10件
地域志向研究プロジェクト申請数	6件	14件	15件
上記プロジェクトの参加教員数	11名	61名	80名

【学内外・地域社会等への波及効果】

(学内)全学的な公募助成の開始により、プロジェクトの件数及び参加教員数が増加するなど、教員の地域教育・研究に対する意識が向上している。  
 (学外)地域二一ズとの収集に伴う地域研究の増加により、連携自治体との協力体制が強化されている。  
 (地域社会)地域人材育成のプログラムの実施の他、授業を通じて学生による地域貢献、教員の地域研究の成果還元など、地域との連携が深化している。

## プロジェクト代表者

一般教育等 教授 八木 宏樹

## 研究テーマ

二級河川余別川（北海道積丹町）におけるサクラマス・サンクチュアリをコアとした地域活性化方策の検討と冬季環境調査

## 研究実績の概要

本事業では、積丹町・余別地区の「自然環境」と「生物資源」を両輪とした余別川の自然の豊かさをアピールし、「今後の余別川の自然を活かした地域振興のあり方」を検討するため、冬季に9回（うち2回は事前調査）の現地調査（環境測定など）と1回の地域勉強会を開催し、環境データの収集と地元住民らの意見収集を行いました。環境調査の結果からは、余別川は全国でも類を見ないほど自然環境が保全されている河川であることが判明しましたが、これをどのように地域振興資源とするかなど、具体策にはつながっていません。今後は、余別地区にあるサクラマス・サンクチュアリセンターを中心に、すでにある程度活動が活発になってきているサクラマス資源保全のための活動などと関連づけて、新たな振興策を検討することになりました。このため、今回構築した研究体制（ネットワーク）を維持しながら、より詳細な調査や地域勉強会を継続することで地域との合意が得られ、新たなステップに入りました。

## プロジェクト代表者からのコメント

余別川がきれいな河川であることは、地域住民も十分に承知しています。ただし、それが「どの程度きれいか」や「都市部の人たちにはどのように映るのか」などは判然としておりません。今回の作業は余別川の高い自然価値を数値で表すための作業です。また、余別川は冬季は雪に埋もれるため、冬季の環境データ（水質データや生物データ）がまったくありませんでした。今回、雪の中の厳しい作業でしたが、冬季のデータを得ることができたことは、今後の余別川や地域振興を考える上で貴重な資料となり得ます。「水環境」を考える場合には、その人が住んでいる地域（都市部であるとか、自然豊かな土地であるとか）や、年齢、職業によって大きく異なります。今後は、今回得られたデータを基礎に、余別川の高い自然価値を、環境省などが提唱している「水辺のすこやかさ指標（みずしるべ）」を用いて解析し、都市部の人たちに向けて、客観的なデータとしてアピールしていくつもりです。

## プロジェクト代表者

社会情報学科 教授 平沢 尚毅

## 研究テーマ

ニセコ地区における中長期滞在型観光客のモビリティに関する研究（1）  
ー観光客行動に関する基本調査ー

## 研究実績の概要

本研究では、ニセコ地区に訪れる外国人観光客が新たな観光体験を促進するためのモビリティサービスを観光客のニーズに合わせて構想するために、観光客の行動実態を調査することから始めた。

調査を分析した結果、観光客の行動傾向には、現地での生活を重視するパターンと訪問する観光地を拡げてゆこうとするパターン、さらに温泉を楽しむというパターンがあることがわかってきた。また、それぞれのタイプは利用する主な移動手段も異なっていた。また、行動のために利用する情報も異なっていることもわかってきた。

これらの行動パターンは、従来の観光中心の観光客行動とは違ったものであり、新たなモビリティサービスを提供する可能性があることが示唆された。

## プロジェクト代表者からのコメント

日本の観光地では、従来のタイプの観光者に対して AR システムの利用や O2O サービスなどの新たな技術による観光支援システムが実証実験されています。さらには、電気自動車向けのインフラ整備が進められており、国内のいくつかの観光地において設置されるようになっていきます。

しかしながら、これらは、観光中心の観光客向けのものであり、今回、明らかになった生活を重視するタイプの観光客向けではありません。ニセコ地域には、私たちが『観光』として考えていたタイプとは異なる行動をとる外国人観光客がいることを再認識しました。

本プロジェクトでは、今後、こういった行動タイプの観光者向けにモビリティサービスを構想してゆく方針を決定しました。

## プロジェクトリーダー

ビジネス創造センター 学術研究員 高野 宏康  
(プロジェクト代表者：経済学科 教授 江頭 進)

## 研究テーマ

小樽における「北前船」の記憶の発掘と観光資源化に関する基礎的研究

## 研究実績の概要

本研究は、小樽における「北前船」の記憶の発掘とその活用を目的とする。小樽は「北前船」の寄港地として、日本海沿岸諸地域をはじめ様々な地域との経済的・文化的・人的交流により発展し、石造倉庫などの多様な歴史遺産が遺されている。しかし、「北前船」が小樽の地域社会に与えた影響、関連資料および関係者の現状はよくわかっていない。また、「北前船」の観光資源化およびまちづくりへの活用の取り組みは寄港地を中心に全国各地で行われているが、小樽では都市の発展に「北前船」が大きな役割を果たしたにもかかわらず、十分認知されているとは言えない状況にあり、「北前船」の様々な記憶を発掘し活用することで、より小樽の歴史的特質にもとづいた観光まちづくりが可能となると考えられる。本研究では、小樽における「北前船」の記憶について、(1)小樽市内および北陸の北前船寄港地での資料調査および関係者への聞き取り調査により歴史の実態を把握し、(2)観光まちづくりへの活用状況に関する調査を行った(江差、函館、松前、小木、宿根木、黒島、伏木、美川など)。その結果、小樽では鯨漁や日本海沿岸諸地域等からの移住者の文化に「北前船」の記憶が現在まで痕跡を留めていることが確認できた一方、観光資源としては「北前船」は曖昧なイメージで語られがちで、実態に基づいた活用が課題となっていることが確認できた。

## プロジェクト代表者からのコメント

小樽では、都市の形成過程に「北前船」が深く関わっており、海運業などの経済的な影響にとどまらず、様々な文化的・社会的影響を与えており、小樽の都市としての性格に不可欠の要素となっている。しかし、これまで「北前船」研究や「北前船」に基づく観光まちづくりが必ずしも積極的に行われてこなかったことには以下のような理由があると思われる。1点目は、本州では「北前船」は近世～明治初期に活動を展開した廻船としての性格が強いが、小樽(北海道)では近代化(開拓)に必要な物資が「北前船」によりもたらされており、その役割に相違がみられることである。また、船型においても「弁財船」から蒸気船まで多種多様な形態が混在しており、本州の典型的な「北前船」イメージに収斂しない。2点目は、小樽は北前船主の出身地・居住地でなかったため、行政や地域住民が主体の観光まちづくりに位置づけるににくいことである。本研究では、小樽における「北前船」は、環日本海諸地域の人々の移動により、多様な異文化が集積する地域、すなわちディアスポラとしての小樽の特徴となっていることが重要であり、小樽の歴史の背景となるストーリーラインとして位置づける必要があることを明らかにした。小樽と「北前船」の関係を様々な歴史文化と観光資源化の両面から検討した研究は本研究が最初であり、新たな地域志向研究の成果と言える。

## プロジェクト代表者

アントレプレナーシップ専攻 准教授 猪口 純路

## 研究テーマ

後志における農水産品のブランド化の課題に関する研究

## 研究実績の概要

当該年度の研究においては、後志地域にける農産品のブランド化の課題を明らかにすることを目的として、既に成果を上げつつある農業生産法人と道の駅管理組合、現在試行錯誤でブランド化に取り組んでおられる農業生産法人グループと観光協会の4つの主体の方々へ、研究室所属の学生とともにインタビュー調査と分析をおこないました。

その結果、以下の点が主な課題であると考えました。(1)ブランド化のために必要なマーケティングに関する知識と理解、(2)ターゲット顧客と販路の整合性を確保すること、(3)旬の季節こそ有効な販路開拓やプロモーションに必要な経営資源を農作業に加えて割ける体制を確保すること、(4)ブランド化の取組を組織化していくこと、(5)地域でしか利用できない資源をブランド化に活用すること、です。

今回の調査を通じ、今後も取り組むべき地域の課題の一端が明らかとなったことは、その解決策の提案へ向けての良い準備となりました。なお、本調査の結果については、より詳細な報告書を作成し、調査先の許可を得て公開することを予定しています。

## プロジェクト代表者からのコメント

まだまだ調査を開始したばかりですが、後志には魅力的な農水産品が沢山あるにも関わらず、市場においてその価値を十分に実現できていないように思われます。他方で、国内と言わず、海外市場への展開可能性も視野に入れながら、後志農産品のブランド化に取り組み、着実に成果を上げつつある方々もいらっしゃるようです。日ごろの研究成果や学生との連携を通じ、後志農水産品の価値を高めることにつながるような調査と研究を進めたいと考えています。

## プロジェクト代表者

社会情報学科 教授 佐山 公一

## 研究テーマ

フェイスブック上の小樽の中国語情報は小樽滞在に結びつくか:外国人に対するソーシャルネットワーク利用動態調査

## 研究実績の概要

生活者の目から見た小樽の生の情報を中国語で提示し、小樽という北海道の一地域に対して台湾の中国人の訪問ニーズがどのくらいあるかを調べました。

日本語の小樽の記事を中国語に翻訳しようとしたところ、背景知識を補う表現をつけたしたり、注釈文をつけたり、ときには文章そのものを構成なおしたりしなければならぬことが頻繁にありました。翻訳に時間を要し、現在も翻訳作業を続けているため、まず日本語の分かる台湾の人に日本語でフェイスブックの記事を見てもらおうことにしました。(なお、中国語に翻訳された記事を使った調査を、現在進めています。日本語記事を使った調査、翻訳記事を使った調査の両方をまとめて公開する予定にしています。)

中国文化大学の職員と学生、計 10 名が質問紙調査に参加しました。小樽市民の書いたフェイスブックページ『おたるくらし』の日本語の記事(写真 1 枚と 800 字程度の文章)を、台湾に住む中国語母語話者で、小樽を訪問した経験のない人に、読んでいただきました。その際、記事がどのくらい面白かったかを評定してもらい、さらに、どのような点が面白かったかを自由記述してもらいました。最後に、ソーシャルメディアの利用頻度や利用目的、日本訪問経験の有無、小樽訪問経験の有無も伺いました。

分析の結果、調査参加者の面白さの評定値は総じて予想よりも高いことが分かりました。

しかし『どちらでもない』、『ややつまらない』、『つまらない』の回答も全体の 3 分の 1 ほど見られました。日本語のできる台湾の人は日本に関心が高いと思われます。それでも 3 分の 1 が肯定的でない評価をした点は、どのような記事をどのように掲載すべきか考える上で、今後の課題となりました。

自由記述を調べてみると、ガイドブックに載っていない情報を知ることができた、あるいは、思い出やノスタルジーが感じられた、などといった、日本人でかつて小樽を訪れた(あるいは小樽に住んだ)ことのある『おたるくらし』フェイスブックのレギュラー読者が読後に抱く評価と同じような、肯定的な評価が多く見られました。いくつかの記事に対しては、関連した観光情報や住所を知りたいという記述もあり、その場所に行ってみたいという意識につながっていることも伺えました。

試行的な調査で、参加者数が少なかったため断定はできませんが、小樽に魅力を感じ小樽への潜在的な観光客となる人が台湾には少なからずいることが分かりました。

## プロジェクト代表者からのコメント

予備調査の結果から、記事の書き手の思い入れやメンタルな部分も台湾人たちに好意的に受け入れてもらえるかと判断できました。そこで、書き手の思い入れのこもった小樽の日本語の生活情報をそのまま中国語に翻訳する方が良く現時点では考えています。その翻訳を記事にして、中国語版の小樽観光情報のフェイスブックページ『小樽生活中文(繁体字)』(下記 URL をご覧ください)を 5 月に暫定的に開始しています。

台湾の人たちの反応は上々で、一日あたり 100 ずつ、ページへのいいねが増えています。2014 年 5 月 15 日現在合わせて 1300 ほどのページいいねを獲得しています。話題にしている人の数も 900 前後あります。中国語版でも、日本語版と同様に、今後、良い方向に展開していくのではないかと期待しています。

## プロジェクト代表者

ビジネス創造センター 准教授 北川 泰治郎

## 研究テーマ

Web ページ、フェイスブックページ上の小樽の日本語観光情報は、小樽のイメージおよび小樽への訪問欲求にどのように寄与しているかに関する現状調査：バーチャル世界のコミュニケーションを観光行動に結びつける方法を探る。

## 研究実績の概要

小樽は北海道開拓を支えた矜持と自負が今も息づいています。この小樽の魅力を発信するフェイスブック上の『おたるくらし』を通じて、ファンは『おたるくらし』にどのような印象を持っているのか、また少し踏み込んで、『おたるくらし』は小樽の訪問欲求喚起につながっているのか、ファンへアンケート調査を実施しました。

まず、記事に対するアンケートでは、写真や文章の質については満足度が80%を超え、文章の量についてはやや満足度を減ずる回答が見られました。さらに友人・知人へすすめたいという意向も80%を超えており、全般的にファン層から維持を得ているとの結果となりました。また『おたるくらし』による小樽訪問欲求喚起に関しては、「おたるくらしをきっかけに訪問した」、「すぐに日程を決めて訪問したい」があわせて15%、「機会があれば訪れたいと思った」が64%と約8割のファンの訪問欲求喚起に貢献していることが判明しました。

他には、イベント開催や誰も知らないような（若しくは個人的に知らない）情報提供などの要望が寄せられ、ファンが抱くイメージや期待に応えていく取り組みが今後必要であることも分かりました。

## プロジェクト代表者からのコメント

観光地域では従来の情報発信に加え、若しくは従来の情報発信手法を変え、フェイスブックというプラットフォームを活用し地域の魅力を発信することが必要です。さらにファンとのコミュニケーションを発展させ、訪問欲求喚起につなげることも重要です。ただし、どのようなファン層をターゲットとし、そのターゲットの心に響く有力な情報をリーチさせなければ効果は半減してしまいますので、投稿記事の受け止められ方、満足度を確認することが欠かせないでしょう。勿論、ファンとの信頼関係を構築、維持することは必須ですし、魅力の発信地である地元の方々からの支持も増やしていくべきと考えます。

**平成25年度「地(知)の拠点整備事業」  
地域志向研究プロジェクト研究助成公募要領**

学 長 山本 眞樹夫

**1 趣旨**

平成25年度「地(知)の拠点整備事業」の一環として、本事業の主旨である地域を志向した教育研究の推進につながる研究活動を広く学内公募し、『地域志向教育研究経費』として研究費を助成します。

**2 助成対象**

地域（特に北海道後志地域及び札幌を中心とした）課題の研究及び社会実験

**3 応募者要件**

- ・ 本学に所属する専任教員で、本事業の主旨に鑑み、地域志向を重視した研究を推進する者
- ・ 同一の研究計画において他から類似の助成金、共同研究費、受託研究費等を受けていない者

**4 助成金額及び採択予定件数**

平成25年度は、予算総額250万円の範囲内で助成します。

なお、支給金額は1件あたり50万円とし、5件程度を採択予定ですが、申請数及び申請内容に鑑み、採択数及び助成金額を増減することがあります。

**5 助成条件（研究期間、成果の報告及び公表）**

- ・ 研究期間は、採択日より平成26年3月31日までです。
- ・ 助成を受けた場合は、平成26年3月31日までにプロジェクト実績報告書（別紙4）を提出してください。また、実績報告書の内容に基づき、研究成果の概要を本学ホームページにおいて公表します。

**6 応募手続**

平成25年12月20日（金）までにプロジェクト助成申請書（別紙1）、研究計画書（別紙2）及び予算計画書（別紙3）を【企画・評価室 研究協力係】に提出してください。

**7 選考手続**

地域研究会運営委員会において選考審査の上、学長が決定します。

**8 その他**

- ・ 助成金は、平成25年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）取扱要領の「5. 補助金の経理管理等」及び学内規程に従い、適切に執行してください。
- ・ 学長は、助成金受給者が事業を遂行できなくなったときは、地域研究会運営委員会の議を経て、助成金の支給を停止します。
- ・ 研究費の不正使用等が発見された場合は、直ちに助成を取りやめます。

**9 申請書等の請求・本件に関する問い合わせ先**

企画・評価室 研究協力係（内線5222, kikaku@office.otaru-uc.ac.jp）

平成25年度「地(知)の拠点整備事業」地域志向研究プロジェクト助成申請書

1. 研究プロジェクト代表者

氏名	所属学科等	職名
印		

2. 研究組織（研究協力者等の氏名を記載）

氏名	所属学科等	職名

3. 研究テーマ

--

4 研究経費（総額） \_\_\_\_\_ 千円

## 研究計画書

(目的・方法について簡潔明瞭に記述すること。内容については、ヒアリングを行うことがあります。)

研究目的

研究計画

研究方法

## 予 算 計 画 書

科 目		申請金額 (単位：千円)	主な使途・内訳
物 品 費	設備備品費		
	消耗品費		
人 件 費 ・ 謝 金	人件費		
	謝 金		
旅 費	旅 費		
そ の 他	外注費		
	印刷製本費		
	会議費		
	通信運搬費		
	光熱水料		
	その他（諸経費）		
合 計		千円	

※ 経費の詳細については、平成25年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）取扱要領の「5. 補助金の経理管理等」を参照してください。

平成25年度「地(知)の拠点整備事業」地域志向研究プロジェクト実績報告書

1. 研究プロジェクト代表者

氏名	所属学科等	職名
印		

2. 研究組織（研究協力者等の氏名を記載）

氏名	所属学科等	職名

3. 研究テーマ

--

4. 研究実績の概要（別紙による記載可能）

（研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、研究計画書に照らし、分かりやすく200字程度で簡潔に記述すること。また、研究の成果は、本学ホームページにおいて広く公表することになりますので、難解な専門用語の使用はできるだけ避けてください。）

--

## 第1回「地域懇談会」(H25.10.23) 要旨【岩内町】

日 時：平成 25 年 10 月 23 日（水）

18：30 ～ 20：30（公開講座）

20：40 ～ 21：30（地域懇談会）

会 場：岩内地方文化センター

参加者：7 名（参加者役職，氏名等は，公表用の本報告書では割愛）

### ■ 岩内講座について

- ・ 平成 7 年度から毎年 1 回，小樽商科大学から講師を派遣し，岩内の一般市民に向けて開催している公開講座。
  - ・ 平成 25 年度は，南准教授による「海のくらしと法律 気楽に『法律』の話聞いてみよう！」と題した講義であるが，講義にかかる質疑応答を含めて，意見交換会という形で「地域懇談会」を開催した。
  
  - ・ 意見交換の内容は，次のとおり。（○が学外者，●が本学関係者）
- 本日の公開講座は，教育委員会が主催しており，大学の先生に来ていただいているのでお聞きしたいのだが，昨今は学校問題というか，いじめの問題がよくニュースになるが，場合によっては自殺にまで発展することもある。自殺にまでつながる「いじめ」については，法的にどうなのか，大学の先生の立場からご意見をお伺いしたい。
  - 非常に難しい問題である。「いじめ」とは何かという明確な定義はないが，自殺まで発展するようないじめは，犯罪と言ってもいいと思われる。最近あったひどい事例では，女子中学生が同級生の男子に友人の女子をレイプするよう命令するなど，子供たちで解決できるような問題では無いものも多い。こうした事例については，法律家や警察の介入が必要だと考えられる。一方，そうした介入が行きすぎるのも問題と思われる。例えば，犯罪と呼べるかが難しいグレーゾーンの事例について，小・中・高の先生が全て法律家や警察に任せてしまうというのは，教育としては問題である。問題解決のために法律家や警察へ協力を依頼するのは，ケースバイケースとなると考えられる。
  - 我々は，「人殺し」は犯罪であると認識しているが，「人殺し」が「悪いこと」であると認知されたのは，歴史的にはいつ頃からなのか。
  - 「法制史」というかなり昔から研究されている分野があるが，人が人を殺すことがいけないことだと認識されたのは，かなり古い時代まで遡ると思われる。ちなみに，合法的と言うか，人を殺しても処罰されない事例が 2 つある。一つは国が行う「死刑」である。もう一つは戦時国際法という法律が関係するが，戦争の時は人が人を殺しても，やむを得ないとされている。ただしこのケースでは軍人に限る。
  - 先ほどの講義の中で，意識することは少なくとも，我々の日常生活の中には，様々な法律が関係しているという話があった。身近な例ではどのようなものがあるか。
  - 今日の公開講座は教育委員会主催であるが，例えば学校の事例。学校の階段には必ず踊り場があるが，これはなぜなのか。転落した場合の危険防止という観点もあるだろうが，文部科学省が決めたルールの中に，「校舎の天井の高さは 3 メートル以上としなければならない」というルールがある。一方で，建築のルールには，「3 メートル以上の階段には，踊り場を設置

しなくてはならない」というものがある。こうした複数の法律が組み合わさって、必ず踊り場を設置しなくてはならないのである。

- 商大事務局から参加者の皆さんに、今日の講義内容について感想をお聞きしたい。通常大学の授業や試験では、「AさんはBさんに」や「甲は乙に」といった人物像を用いて事例紹介をすることが多いが、今日の講義で講師は「たら丸くん」という岩内のマスコットキャラクターを使って、漁業に関係する事例紹介をしていた。今日の講義内容は、分かりやすいものであったか。
- 地元キャラが出てきたこともあり、親しみやすく分かりやすかった。
- 講師の方は「たら丸くん」を用いた事例紹介の中で、「法律家が著作権に違反してはいけないので、スライドにたら丸くんの画像を入れなかった」と話していたが、「たら丸くん」の著作権は、岩内の商工会議所が保有している。今後利用するようなことがあれば、一声かけてもらえればすぐに許可が出せる。
  
- 先ほどの講義の中で、講師が昨年度も出席した方に挙手をお願いした際に、手を挙げたのは1名だけであった。この公開講座は今後も年に1回開催を予定しているが、機会があればまた参加したいか。
- 公開講座のお知らせがあれば、是非また参加したい。(全員)
  
- 今日の公開講座については、新聞、地元広報誌、役場のHPで情報を確認できたが、参加した方々がこのイベントを知ったきっかけは？
- 役場から職場に送られてきた案内で知った。
- 昨年度からHPにもお知らせを載せているが、例年直接案内を送った企業からの参加者が全てである。(岩内町)
  
- 公開講座のテーマは、要望があれば対応してもらえるのか。
- 公開講座の講師及びテーマについては、以前は教育委員会から直接依頼していたが、講師を探すのが非常に大変であったことから、現在は講師の方に翌年度の講師を紹介してもらうリレー方式になっている。来年度の講師は、南先生からご紹介いただくこととなる。(岩内町)
  
- 今回は急遽意見交換会を設定させていただいたが、小樽商科大学は、より一層地域志向型の教育・研究を推進する予定であり、小樽だけでは無く、後志地区の地域振興や課題解決に取り組んでいきたいと考えている。地域が抱える課題や大学に対する要望等があれば、お聞かせいただきたい。
- 具体的な課題はすぐに思いつかないが、今日のように大学の先生に話を聞ける機会は、とても貴重だと思った。私は北海道行政書士会に所属しており、今後小樽で研修会の実施を考えているが、小樽商科大学の先生に講師として来ていただくことは可能なのか。今日のように教育機関主催のものや公開講座に限るのか。また、可能な場合は、いくらくらいかかるものなのか、目安があれば教えてほしい。
- 現在は国家公務員ではないので、大学からの講師派遣は、教員が了承した上で兼業手続きをすれば可能である。費用の目安については、謝金単価や交通費負担の有無など、依頼元と教員の話し合いによってケースバイケースと考えられる。大学に戻ってから、過去の事例を確認して、目安として示せるものを、あらためて連絡させていただく。

- 大学の事務局からも話があったが、要望や質問がある場合、後日でも連絡いただければ対応させていただく。私は法律家であるが、法律の話だけではなく、例えば、岩内町の名産であるスケソウダラが今後獲れそうか？といった相談でも構わないので、気軽に大学に相談していただきたい。

以 上

## 第2回「地域懇談会」(H25.10.30) 要旨【倶知安町】

日時：平成25年10月30日(水) 20:30～22:00

会場：JA ようてい(倶知安町) ※第10期羊蹄山麓大学参加者を対象に開催

参加者：7名(参加者役職、氏名等は、公表用の本報告書では割愛)

※ 意見交換の内容は、次のとおり。(○が学外者、●が本学関係者)

●小樽商科大学は、今年度文部科学省の補助金事業「地(知)の拠点整備事業」に採択され、これまで以上に地域に目を向け、地域振興と人材育成に取り組んでいきたいと考えている。本日開催の羊蹄山麓大学は、地域のリーダーを育てることが趣旨の会であり、多種多様な職種の方々が参加していることから、是非お話をお伺いしたい。

●少し大雑把な質問ではあるが、現在抱えている業務の関係等で、大学に相談したい事例、協力を依頼したい事例などはあるか。

○自分は自動車整備を生業としているが、最新技術の勉強を含め、工業系の大学であれば機会があればお話を伺いたいと思うが、商科大学となると、全く見当もつかない。

○農業に従事しているが、帯広畜産大学や北海道大学に品種改良等で研究してもらえらるなら別だが、ビジネス相談という観点では、話を持って行きようがない。

○そもそも商科大学というのが、何をしているところか、イメージがつかめない。

○やはり大学と言うのはとっつきにくいというか、敷居が高い。

○例えば、我々は「空中戦」と呼んでいるが、ネットを活用した広報で苦勞している。個人で農場を経営している者には高齢者も多く、自分の農場のホームページを作成したり、SNSを利用した広報活動などのIT関連には疎い。ホームページの作成等についても、相談に乗ってもらえるものなのか。

●単純にホームページの作成・運営といった個別事例については、難しいと思われる。

○大学は研究を行うところというイメージが強い。具体的に研究と結び付けた相談というのは思いつかないが、地域の者には見えない問題点等について、外部者の意見を聴くという意味では、有益とも考えられる。特に学生ならではの視点で、地域の問題点について意見をもらうというのは貴重ではないか。

○大学の研究者よりも、学生の視点やパワーといったものの方が、地域にとっては必要な要素ではないか。ボランティアスタッフなど、学生の力を借りたいことはある。

○研究者が研究室に鎮座して、地域からの相談を待つという姿勢では、何も生まれない。大学側から直接地域に出向き、特に学生が地域の中に入って交流できるようなシステムが必要だ。

○「大学にどうぞ来てください」と言われても、大学に何が出来るのかがよく分からないし、大学から地域に出向くにしても、単なる「御用聞き」で終わるのであれば、何も情報を得ること

はできないと思われる。

○ホームページ等には大学の研究内容が載っているのかも知れないが、ホームページを見て自ら情報収集した上で相談をお願いするという気にはなれない。

●お話を伺っていると、「大学に何ができるか分からないと、相談のしようがない」という印象を受ける。また、ホームページで一方向的に情報発信しても、情報は届かないということかと思われる。例えば、学生のサークル活動や、教員の地域貢献可能事例等を一覧にして、1枚の紙にまとめたようなものを作るというのはどうか。

○そのような分かりやすい資料とともに御用聞きの形で来てもらえるならば、その資料を見ながら、お願いしたい事例が出てくるかも知れない。ネットに大量の情報があるよりも、1枚の紙でもらった方が分かりやすい。

○自分は弁護士であるが、弁護士に相談に来る方々というのは、相談内容や目的がハッキリしているとともに、弁護士に頼らなければならない状況を抱えている。窮地に陥った時に相談先として「大学」を思い浮かべる方は少ないのではないか。また、大学に頼らなければならない状況というのが想定できない。

○また、弁護士も初回相談は無料というケースが多く、「無料」の部分までは多くの方が相談に来るが、有料の部分になるとサッといなくなってしまう。例えばビジネス相談や研究協力を大学にお願いした際も、料金が発生するとなると相談者は引いてしまうのではないか。

●本学ではビジネス創造センターという組織があるが、相談は無料でも、具体的に話を詰めていく段階で、共同研究にすると料金が発生するということはある。ただし、今回は補助金がついたこともあり、地元のニーズに対して、相談者から費用を徴収すること無く、研究を行うことが可能になる場合もあると考えている。

○大学は、そもそもどこを向いていると考えればいいのか？志願者の確保や教育が主目的ではないのか？それとも、地域貢献をこれからの主軸にしたいということか？

●志願者確保も当然必要であるが、大学が淘汰される時代が来ており、これまでのように学生を入学させて教育するのみでは生き残れない。特に小樽商科大学は地方の小規模単科大学であるため、地域貢献というか、地域と共に歩む姿勢は欠かせず、これまで以上に地域志向大学に特化する必要がある。教育、研究及び社会貢献といった大学が備えるべき機能の全てを強化し、改革が必要な時期に来ていると考えている。

○地域というのは、後志地域を意味するのか？それとも小樽だけなのか？

●今回の補助金の趣旨からは、後志地域全体及び札幌が中心と考えている。

●後志地方は農業・漁業・観光といったコンテンツの宝庫だと考えている。農業関係の方にお聞きしたいのだが、例えば魚の例では、「大黒サンマ」のようなブランドがあるが、農産物の地

域ブランド化という観点で、大学が協力できるようなケースは考えられるだろうか。

○農作物のブランド化に関しては、個人的な意見ではあるが、あまり考えていない。例えば、中間マージンのカットや、ブランド化による販売単価の上昇という観点で、そういう考えを持つのかも知れないが、個人で販売した方が儲かるわけではない。実は農協の仕組みというのは良くできていて、特定の農作物に付加価値をつけて売るよりも、農協に卸す方がずっと利益になることも多いし、安定もする。例えば、ジャガイモは消費者から見てもとても安いから、〇〇ジャガイモのようにブランド化して高く売れば、という考えを持つ人もいるかも知れないが、実はジャガイモはかなりの高収益作物である。

●例えば農業を営む方が、食品の加工や流通販売に業務展開する「第6次産業」という言葉があるが、こうした業態への展開を望む方も多いのだろうか？

○儲かる場合もあるとは聞いているが、ある程度大規模じゃないと実現しないのではないだろうか。人手に余裕がある農家は少なく、また、幅広い知識や技能を持った人がいないと難しい。人件費と言う大きなコストをかけて、業務拡大するリスクは大きい。

●今回の羊蹄山麓大学は、まさに地域の人材育成の企画であるが、残念ながら今回で終了を予定している。例えば大学が同様の取組を行う場合、参加・聴講したいと思うか。

○自分自身の話であれば、車関連のセミナーであれば受けたいと思うし、大学が実施しているかどうかよりも、受けたいテーマか否かが、参加の動機になる。

○参加費用も一つの判断材料である。参加費が安かったり、無料であることに越したことは無い。その反面、無料だと講義に対する意識や取組姿勢が低くなる可能性が高い。ただし、先ほどの方と同様であるが、興味がある内容かどうかが一番重要だと思う。

●貴重なご意見をありがとうございました。大変参考になりました。協力できるような事例がありましたら、お気軽にお声掛けください。今後ともよろしく願いいたします。

以 上

### 第3回「地域懇談会」(H25.11.3) 要旨【ニセコ町】

日時：平成25年11月3日（日） 13:00～14:00

会場：ヒルトンニセコビレッジ 3F小ホール

参加者：7名（参加者役職、氏名等は、公表用の本報告書では割愛）

---

※ 意見交換の内容は、次のとおり。（○が学外者、●が本学関係者）

●小樽商科大学は、今年度文部科学省の補助金事業「地(知)の拠点整備事業」に採択されており、特に観光を軸として、これまで以上に地域振興と人材育成に取り組んでいきたいと考えている。本日開催の「味覚フェスタ！」は、観光と切り離せない「食」をテーマにした一大イベントであり、羊蹄山麓全域から様々な職種の方々が集まっている。是非お話をお伺いしたい。

●「食」と「観光」、それに「大学」がどうリンクするか、イメージをつかみにくいと思われるが、皆さんが現在抱えている業務上で、または、本日のようなイベントに関連して、大学と連携できるような事例などはあるか。

○本日のイベント（羊蹄山麓味覚フェスタ！）は、今回で10回目を数えるが、10回を区切りとしていったん終了することとなる。ここ数年の参加人数は500～550名程度であり、ある程度動員数は安定しているというか、地域での認知度はあるものだと考えている。今後別の企画が進行するのであれば、後援をお願いするという形は考えられる。

○自分は後志地域に来て日も浅いが、羊蹄山麓は食材の宝庫である。料理に必要な様々な食材が、周辺地域で全て揃う環境というのは、全国を探してもなかなかないのでは。こうした地元の素晴らしい食材を使った素晴らしい料理を広めていく、PR活動で連携は考えられるかも知れない。

●例えば、小樽商科大学では、教員と学生が地元企業と連携して、「小樽あんかけ焼きそば」の普及・PR活動に取り組むなどの実績がある。また、「あんかけ焼きそば事典」を発行するなど、具体的な活動実績があるが、こうした連携も考えられるだろうか。

○PR活動には、地域の人たちもかなりエネルギーを割いているが、新しい視点というのは貴重だと思う。後は、その活動が実を結ぶまでの粘り強い継続性というものも必要である。

○小樽あんかけ焼きそばのことは知っている。参考までに、これには作り方や、地元産の食材を使う等の統ルールみたいなものはあるのだろうか。例えば、最近の後志の取組で、「食べるスープ：しりべしコトリアード」というものがあり、提供店舗それぞれの創意工夫があるものの、魚介、農作物から1種類以上地元産の食材を使う等のルールがある。

●小樽あんかけ焼きそばについては、作り方、使用食材に関する統ルールはなく、むしろ、各店舗のオリジナリティを尊重・重視しており、小樽市内でバラエティに富んだメニューを提供していると聞いている。

○PR活動はやはり大事だと思う。出来る限り地元の食材を使うようにしており、調味料もその一つであるが、例えば「ニセコみそ」をご存じだろうか。今日の料理教室でも使用するが、味噌としてとても優れている。1パック600円程度で、安売りで売っている「田舎みそ」などと比べたら、3～4倍の値段はするかも知れないが、一度使えばリピーターになると思われる。

○PR活動や品質維持の観点で、逆にお聞きしたい点がある。今日のイベントでアンケートも実施予定であるが、「ゆめぴりか」という米の品種があるのをご存じか、また、食べたことはあるか。

●知っている。実際に何度か買ったこともある。

○食べた感想について、忌憚のない意見をいただきたい。

●正直に話せば、最初に食べた時は感動すら覚えた。最初は出始めでなかなか手に入らなかったため、次の年に2回新米を買ったが、別の品種じゃないかと思えるくらい、食味が変わっており、それから購入していない。知り合いの生産者から、ゆめぴりかが人気になったため、道内のあちこちで作付け面積が一気に増え、失礼ながら玉石混淆というか、出来の悪い種子で作られた出来の良くない商品が出回った時期があると聞いたことがある。

○まさにそのとおりで、冷害等の気候的な問題や、栽培地域の向き不向きがあったかもしれないが、たんぱく含有率などが基準に満たない、つまり食味の劣る商品が流通した時期がある。現在は全道の統一基準があり、「種子更新率100%」、「栽培適地生産」及び「たんぱく含有率基準」を満たしたものに認定マークが付されることとなった。意外と知られてないが、この認定マークのPR活動をしているところである。是非認定マークのついた商品を再度お試しいただきたい。

○大学は、研究拠点というイメージがあり、生産者・調理人・ホテルといった構図に比べて、連携のイメージが沸きにくい。大学生のマンパワーという点で期待できる点はあるか。

●例えばホテルとの連携では、グランドパーク小樽（旧ヒルトン小樽）とのタイアップ企画で、現役女子学生が考えた宿泊プランが採用されたことがある。

○それはどのようなプランで、集客効果はどうだったのでしょうか。また、現在も継続しているのだろうか。

●プランが3つあったと思うが、巨大パフェが食べられる女子会満腹プラン、母親と共に泊まる親孝行プランなどがあったと思う。昨年度のプランなので、現在は実施していないと思われる。利用実績については分からないが、新聞等でも何度か取り上げられていた。

○農業には農業の悩みも多い。果物などが顕著であるが、一番美味しい時期が、一番収穫がある時期であり、かつ一番安い時期ということだ。また、豊作だったとしても、作物は生き物なので、収穫した時点でこれからどうしよう、と考えていたのでは間に合わない。大学は、現場の問題に対してスピード感を持って取り組める組織体なのか。

●例えば、今年はメロンが豊作なので何か活用策を、という話を急にいただいたとしても、期待に添えるようなスピードで、機動的に解決策を提示することはできないと思う。しかしながら、ニーズをあらかじめ把握することによって、大学が対応策検討の一助になることは可能と考えられる。今後本学では、地域連携コーディネーター及び専任研究員の採用を予定している。それらの教員・研究員による本格的なニーズ調査はこれからであるが、常日頃から連携し、事例・ニーズを蓄積することによって、支援できる案件は広がっていくと考えられる。

以 上

## 第4回「地域懇談会」(H25.11.21)要旨【小樽商科大学】

日 時：平成25年11月21日(木)14時00分～14時30分

場 所：小樽商科大学事務棟2階第一会議室

出席者：32名(参加者役職、氏名等は、公表用の本報告書では割愛)

和田議長から、地域ニーズの掘り起こしや、社会貢献としての地元人材育成プログラムを検討するにあたり、地域が抱える問題等について情報提供をお願いしたく、地域連携会議に引き続き、COC事業の一環として、地域懇談会を開催したい旨の発言があった。

### 1. 各構成機関が実施している意見交換会の事例について

議長から、地域の問題解決のための意見交換会などの開催事例を紹介していただきたく、また、そうした意見交換会に、可能な限り大学も参加させていただきたい旨の発言があった。

#### 【北海道庁】

経済部産業振興ビジョンを掲げ、毎年5月～6月にかけて経済関係の団体、自治体などに地域の景況、経済の活性化にかかる取組を聞く意見交換会を今年度から行っている。14の振興局に道庁が出向くものであり、商大に参加していただくことは可能である。

#### 【ニセコ町】

まちづくり懇談会にも先日参加していただいたが、その他にも観光事業者、ホテル支配人が集まって懇談する機会がある。また、商工会の集まりもあるので、そちらに参加していただいてもよい。今年度まで観光人材の育成を経済産業省の事業で行っており、人材育成プログラムの開発も行っているため、そちらも活用し、より良い観光圏の人材育成に取り入れていただければと思う。

議長から、地域における意見交換会については、今後も情報を提供していただきたく、あらためて各構成機関に照会又は相談させていただきたい旨の発言があった。

### 2. 各地域における観光人材育成の取組について

議長から、本学の観光人材育成プログラムの展開について、次のとおり説明があった。

本学では、文学・歴史についての公開講座を行っており、今後は観光人材育成の視点から、本学の教育資源をうまく組み直してプログラムを展開したいと考えている。人材育成について取り組んでいる自治体などがあれば、お話を伺いたい。

## ＜事前提出資料に関連して＞

### 【北海道庁】

観光振興局主催による外国人観光客受入研修会が、ニセコ地域で11月18日に開催された。今回はムスリムの方を対象にした料理の提供などについて、ムスリムに詳しいニセコ町職員のニュージーランド人ポール・ハガードさんに講演を依頼した。

議長から、資料には広域観光人材ネットワークづくり事業とあるが、講師として本学が参加することは可能か。との質問があり、各地で行っているので相談の上、参加するのは可能との回答があった。

## ＜その他観光人材育成の実例について＞

### 【後志総合振興局】

道庁とは別に、後志総合振興局主催で行っているものもある。観光に関しては、「後志国際観光リゾートエリア魅力アップ事業」を行っている。食と観光をテーマにして観光振興事業を行っており、人材育成としてホスピタリティー向上の取組を行っているほか、観光に携わる観光職員に対して観光資源の情報共有、情報案内機能強化の研修を行っている。観光客は1市町村だけに訪れるのではなく、周辺地域にも足を運ぶ。その際に観光職員に周辺地域の情報をあらかじめ共有しておくことで、観光客に十分な案内ができると考えている。平成25年度は12月12日に実施予定であり、食と観光をテーマに、食を活かしたまちづくり観光セミナーとして講演を行う。また、後志の食の魅力の探し方・発掘についてワークショップ及び意見交換を行い、周辺市町村から見た地域の魅力を出し合い、ミリオン資源の発掘を行う予定である。

その他に、北海道新幹線開業を見据えた新たな観光地域づくりとして、渡島の総合振興局が中心となり、渡島・桧山・後志が観光地として観光客をお迎えできるような体制づくりに取り組んでおり、その中で観光コンシェルジュを育成することに力を入れている。

### 【札幌商工会議所】

3年前からアジアからの観光客が増加していることから、アジア向けの観光事業者に対する講座を開いている。主にアジア観光客の対応の仕方、接客会話を学ぶ。また、中国語の通訳ガイドを作成するなど、観光案内に役立つ資料作成を行っている。今後は韓国語についても展開予定である。また、食でもてなすという観点から、中国人などアジアの方々の好む料理の作り方講座を、有名シェフに依頼して行っている。

また、今年初めて、社会人基礎力育成事業の一環として、北海道の観光状況を踏まえた上での、外国人観光客に対する新しい企画を、留学生と学生に考えてもらっており、商大生にも参加していただいた。今月30日に最終発表会が開かれる予定である。

【事務局から小樽商工会議所に質問】（●事務局 ○小樽商工会議所）

- 事前に提出いただいた資料の中で、おたる案内人検定のフォローアップとして、「まちかど教室」を行っているようだが、どのようなことを行っているのか。
  - 月1回18:30から19:50まで「ゆめぼーと」を利用し、「まちかど教室」を行っている。講師を呼んで、歴史や地域に関する内容を、小樽案内人に対して講演していただいている。プログラムに関してはホームページに載せている。
- 今年度限りで「ゆめぼーと」がなくなる予定だが、今後商大が「街中教室」を設置した場合、そちらとタイアップしていただくことは可能か。
  - 3月で「ゆめぼーと」が終了するというところで、現在開催場所を探しているところ。運営委員会が、小樽市に無料で提供していただける場所を確認している。商大の街中教室の場所次第では、そちらを利用することも検討したい。12月3日に運営委員会があるので、その段階で間に合えば連絡いただきたい。

以 上

## 第5回「地域懇談会」(H25.12.14) 要旨【小樽市】

日 時：平成 25 年 12 月 14 日（土）16 時 15 分～17 時 10 分

場 所：小樽商科大学 まちなか教室

出席者：40 名（参加者役職，氏名等は，公表用の本報告書では割愛）

和田理事から，地域懇談会の主旨の説明があり，地域における課題，問題点，本日の感想など，自由でざっくばらんな意見交換を行いたい旨の発言があった。

### 本日の事業成果報告会に関して

#### 【一般市民】

今回の「おたる暮らし」における facebook の取組は，文字の多さをコンテンツとして利用する発想がとても面白い。お年寄りには文字を読むのが大変であろうということから，以前私が仕事をしていた際は文字数を少なくしていたが，逆に文字数の多さは，ターゲットによっては適していると思った。また，高齢者には老眼という問題もあるが，デジタルデバイスは，文字を拡大できるので良いと思う。参考までに，どれくらいの時間帯にログインが多かったか。

#### 【近藤氏，佐山教授】

ログインが多いのは 18 時以降である。朝 7 時くらいに記事をアップすると，朝 8 時には多くのコメントが寄せられている。この結果から，男性は朝の通勤前に新聞代わりのように読む方が多いのではないかと思われる。現在は男性のファンが多いが，今後は同じくらい女性のファンも増やしていきたい。また，男性と女性ではニーズが異なること，また，女性は結婚前と後では違いが出てくるので，そのあたりも考えていきたい。

#### 【篠崎名誉教授】

単に男女別でよいのか。IT弱者というものもあるのではないか。

#### 【一般市民】

音声の使用も一つの方策ではないか。読むのに 3 分かけると，聞くのに 3 分かけるのでは違う。youtube を使うなどの戦略も考えられるのではないか。

#### 【佐山教授】

最初は Web は 400 字が限界だと思っていたが，400 字では思い入れが伝わらないと思い，文字数を増やした。「おたる暮らし」は，画像 1 枚と 800 字で作っている。高齢者は長めの文章を読む。動画のマーケティングは，進めているところである。

#### 【事業協力者：中山氏】

スマホなどのデバイスが高速化に対応できるようになってきて，動画マーケティングが

一般化してきている。高齢者向けに動画を配信するというのもありだと思う。ただし、北前船の映像など、当時の映像コンテンツが不足している。今のうちにアーカイブしていく必要がある。

## 今回の地域懇談会のテーマに基づく討議

1. 地域の魅力発信について
2. 小樽の歴史遺産と観光まちづくりについて
3. COC 事業全般について

### 【一般市民】

学生に質問したいのだが、商大を受験する前に、大学が坂の上にあることは知っていたのか。坂の上にある大学のロケーションについて思うことはあるか。また、毎日坂を上る中で、どのような思いで小樽の街を見て、これから自分たちが何を小樽に返していこうと考えているか。

### 【学生】

1, 2 年生のころはいっぱい歩いて、山に向かってひたすら歩いていた。運河に行ったこともなかったし、小樽について何も知らなかった。3, 4 年生になったときにこのままではよくないと思い、小樽を知ろうと思ったが、1, 2 年生のうちから観光に触れ合う機会があったらよかった。

### 【一般市民】

小樽商科大学という名前を背負って卒業していく人間として、このような会をきっかけに、自分の中で整理して、考え直してほしい。

また、学生は facebook など発信する力が非常に強いので、そこも活かしてほしい。

### 【江頭教授】

昭和 20 年代から 30 年代(小樽の全盛期)にかけてこの時代を生きてきた方は、亡くなっている方が多い。かつて栄えた中華料理屋やレストランなどの経営者、従業員も数人しか残っていない。また、高野氏の発表にもあった「梅月」だが、1 号店の写真は「あんかけ焼きそば辞典」をつくる段階では 1 枚も見つからなかった。カメラもほとんどなかったため、記録もされていない。完成後に写真が見つかったが、入手するのは非常に困難である。家にあるアルバムに古い写真があれば、提供してほしい。

COC 事業では、全学年必修の科目をつくらなければならないが、1 年生から学生を街に出して教育したいと考えている。

### 【篠崎名誉教授】

話を聞くべき人はたくさん知っている。(千里屋の北村さん、信盛堂の佐藤さん、三河屋

の道井さん ※固有名詞，人名漢字などの正式名称は不明）そういう方々のところに向いて話を聞いてはどうか。

**【一般市民（市役所で観光行政を担当）】**

市の観光室長はお金をかけないで，情報発信をしていこうという方針である。以前ローリータファッションのイベントを実施したが，西洋のイメージがある小樽の町並みは，このような取組が馴染むものと考えられる。

小樽の観光が発展したのは，良くも悪くも，昔のものが手つかずに残っていたからである。今の学生はどれだけ小樽の魅力を知っているだろうか。札幌在住の学生が多いのかもしれないが，学生時代に小樽の街を歩いて，遊んで，色々経験してほしい。そして，社会人になって「小樽はどこがいい？」と聞かれたときに，ぜひ小樽の魅力を紹介してほしい。

また，なくなったら困るような店に，人を連れて行ってほしい。年齢的に店をやめる方も多いが，高齢な店主がいるような店にも行ってほしい。

**【学生】**

マジプロで花銀商店街に足を運ぶようになったが，面識のある方が増えると，商店街にも行きやすいと思った。また，これからはチェーン店以外の利用も心がけたい。

**【一般市民（小樽市市議会議員）】**

地域の方は，商大生は「街に降りてこない」，「遊ばない」，「働かない」と思っている。しかしながら，これは上から視線であり，むしろ地域の側から学生に小樽の魅力を発信すべきだと思う。また，小樽の人が言う魅力だけではなく，学生自身が感じる魅力を発信して行ってほしい。

**【篠崎名誉教授】**

小樽に関する知識を早い段階からインプットすべきである。入学式オリエンテーションで，小樽に暮らす人が 30 分くらい話をしてはどうか。

**【江頭教授】**

COC 事業では，地域のことを知るカリキュラムを作るように言われている。まちなか教室を拠点として，小樽に触れさせようと思っている。

**【大津准教授】**

経済的な背景もあるが，商大生は小樽に住まなくなってきた。

**【江頭教授】**

ゼミ生一人あたり 1000 円程度で家を一軒借りて，活動させる予定である。安西さん（市議会議員）もシェアハウスを行っているので，そのような場所があれば学生も小樽に住んでくれるのでは。また，ゼミを 3 年でスタートするのは，就職活動と重なるので遅いと思

う。もっと早く始められたら、いろいろできるのと思う。

**【学生】**

今日の成果報告会で、自分たちが作成した「あんかけ焼きそば辞典」が学術的に使われていて、驚きと喜びがあった。

**【江頭教授】**

あんかけ焼きそばの取組により、学生は小樽に行きつけの店ができた。金太の金太のおにぎりなど、もともとは商大生の為に考案されたメニューが多くある。これが小樽と商大生の昔からの姿であり、商大生と小樽の食文化は結びついていると思う。

**【一般市民】**

今日の一日でディープな小樽を知ることができ、新しい発見があった。マジプロも6年目になるが、マジプロには多くの小樽の方が関わっているの、1年1年で関係が切れるのではなく、学生は変わっても、底辺の部分では小樽につながってほしい。昔お世話になった方にもマジプロ発表会の案内をするなど、関係を継続してほしい。

また、他県の大学生を街全体で受け入れる「小樽留学」などの取組も面白いと思う。

**【学生】**

札幌在住2年目であり、小樽の街を歩く機会もなかったが、もともと歴史に興味があったので今日の空き時間に歩いてみたところ、知らない小樽がたくさんあった。私のように全く小樽を知らない人に向けた情報発信というのも重要ではないか。

**【一般参加者（同志社大学教務）】**

プロジェクト科目の事務局を担当しており、マジプロに興味があつて来た。短期間かつ少人数でよく活動しており、参考にしたいと思う。

**【李センター長】**

ニセコは過去最高の観光客数となっている。アクティブシニアの増加が要因である。隣の倶知安町では、滞在日数平均が6.8日というデータがあり、これは小樽にとってはうらやましい。日ごろCBCで地域連携、産学官連携をやっているが、滞在型の観光をテーマに、地域のニーズを組み込んだ形でやってきたい。また、小樽を海外、特にアジアにアピールしていきたいと考えている。

北川准教授から、平成26年1月18日（土）に開催される「しりべしの広域観光をデザインする！」のイベントの案内があり、次いで、和田理事から次のとおり総括と閉会の挨拶

拶があった。

研究については、地域に貢献できる研究をやって成果を出したいと考えているが、COC事業においては、教育も重要である。自身が赴任した30年前と比べて、今の学生たちはずっと小樽に貢献しているが、地域を支えるような教育プログラムを作りたいと考えていきたい。

これからもこのような形で地域の方々と意見交換を行いたいと考えているので、今後ともよろしく申し上げます。

以 上